令和4年度

日本文化特別演習 報告書

第10号

北海学園大学人文学部

令和4年度

日本文化特別演習 報告書

第10号

北野天満宮にて

北海学園大学人文学部

第1日 3月1日
[団体研修]

大山崎町歴史資料館視察、長岡京跡巡検

大山崎町歴史資料館

大極殿公園

茶室・待庵

北山遺跡

元稲荷古墳

長岡京跡築地塀（復元）

第2日 3月2日 ［団体研修］

京都市街地巡検(午前)、京都市景観・まちづくりセンター視察(午後)

旧西陣小学校

史跡御土居

民家の塀に埋め込まれた路傍祠

千本釈迦堂前

北野天満宮

上杉本洛中洛外図屏風(複製パネル)

展示施設「京のまちかど」(京都市景観・まちづくりセンター内)

京都市景観・まちづくりセンター

第3～5日

3月3日～5日

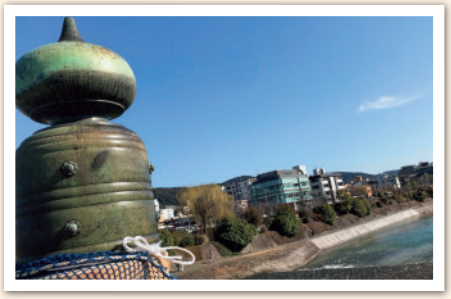
［自主研修（個人）］

城南宮の椿

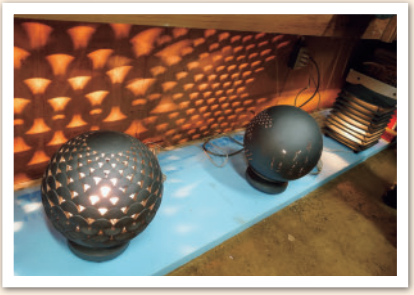
家邊徳時計店

神泉苑

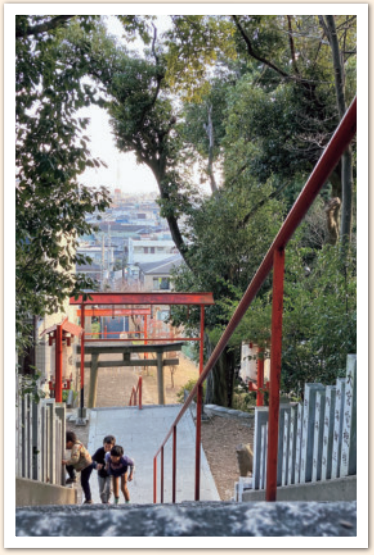
柳の水



三条大橋の擬宝珠の刀傷



浅田製瓦工場の作品

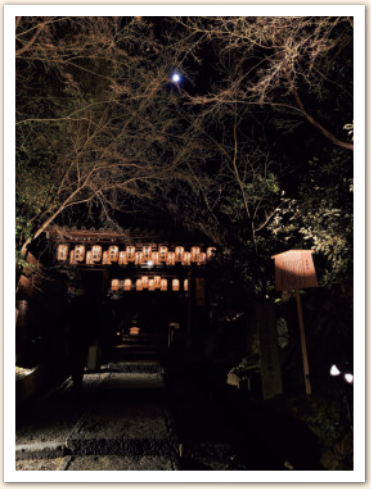


忍ケ丘古墳にて

鴨川と三条大橋

復元された高瀬舟（高瀬川一之船入）

おもちゃ映画ミュージアムの
チャップリンパネル



夜の高台寺

石宝殿古墳にて

第6日 3月6日
［研修成果発表会］

目　次

令和4年度　日本文化特別演習　報告　引率教員　谷端　郷　手塚　薫

イメージの裏側の京都　畑　愛理 …… 1

京都に残る鎌倉時代の遺跡を巡る　南　咲希 …… 3

高札場が立てられた場所がなぜ三条大橋だったのか　久保　雪菜 …… 5

京都の川を巡る　竹花美恵子 …… 7

鍾馗さん探しから広告まで、変化し続ける京都を考える　髙山　礼海 …… 9

千利休を生み出した堺の地政学的特徴　池田　大青 …… 11

令和4年度 日本文化特別演習　報告

引率教員　谷端　郷　手塚　薫

日本文化特別演習が3年ぶりに実施され、無事終了しましたことをまずはご報告いたします。3年前は、新型コロナウィルス感染症が本格的に流行する直前という時期に、不安を感じながらも細心の注意を払って実施されたことが本報告書第9号の引率教員による前書きに記載されていました。それから3年が経過した令和4年度も、当初は流行状況が見通せませんでしたが、年が明けるとマスク着用ルールの緩和や感染症法上の5類移行などが議論され始め、徐々に「出口」のようなものが見えてきた中でこの度の実習が実現しました。

今回も例年同様9月～1月にかけて3回の事前ガイダンスを実施したあと、3月1日（水）から6日(月)の5泊6日で実地研修を行いました。今年度の実地研修の日程は以下の通りです。

1日目　移動（新千歳空港→伊丹空港→〈貸し切りバス〉→大山崎町・向日市を経由して京都）
　　団体研修「大山崎町歴史資料館視察、長岡京跡巡検」
2日目　団体研修「京都市街地巡検（午前)、京都市景観・まちづくりセンター視察（午後)」
3日目　自主研修（個人研修）
4日目　自主研修（個人研修）
5日目　自主研修（個人研修）
6日目　研修成果発表会→〈公共交通機関〉→関西国際空港→新千歳空港

履修者（参加者）数は、履修登録時に未だコロナ禍の先行きが見通せないこともあって6名にとどまりましたが、各自事前準備を精力的に進めるとともに、実地研修でも特定テーマの下で積極的に研鑽を積むことができました。とくに、自主研修が3日間もあると、1日目や2日目の調査結果を踏まえて3日目には調査先を変更するといった柔軟な対応も見られたことが印象的でした。本報告書は実地研修の成果をまとめた各自の事後レポートをもとに作成されたものです。ぜひご高覧下さい。

最後になりましたが、1日目の団体研修で大山崎町歴史資料館の館内をご案内いただいた館長の福島克彦様、2日目午前中の団体研修で京都市街地の北西部巡検でご指導いただいた立命館大学文学部准教授の村中亮夫先生と立命館大学大学院文学研究科院生の八巻栞さん（日本文化学科令和3年度卒業生)、2日目午後の京都市景観・まちづくりセンターの視察でご対応下さった泉谷武史様・富永絢子様をはじめボランティアガイドの冨名腰隆様・日置幸生様に現地で大変お世話になりました。また、（株）ブルーツーリズム北海道の浦口宏之様には今回の研修旅行の各種手配をいただきました。ご協力いただいた皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

イメージの裏側の京都

1部日本文化学科　2年　2721163　畑　愛理

はじめに

京都は日本の伝統・文化を纏った「和」のイメージが強い都市である。しかし、京都は意外にも洋食文化が栄えていたり、外国の文化を感じられるスポットが多くある。自身がコーヒー好きで、京都はコーヒーが多く消費されている街であると知ったことをきっかけに、今回は京都の「洋」の部分に着目し、イメージの裏側の京都を探ろうと思う。

1．京都で体感する外国文化

京都といえば「京町家」のイメージが強く、日本の伝統的な家屋が建ち並ぶ風景を想像するかもしれないが、京都市内には「近代建築」が数多く残されている。中でも三条通にはモダンな近代建築が建ち並んでおり、実際に訪れてみると、京都の人たちにとって近代建築はありふれたものなのではないかと感じられた。その理由の一つに、家邊徳時計店がある。京都で現存最古の洋風商店建築で、有形文化財にもなっている。驚いたのは、中が今どきのアパレルショップであったことだ。店内には木製の螺旋階段があったり、壁に洋風の装飾がなされていたり、歴史を感じられたが、文化財にもなっている貴重な建物であってもそのように活用されていることが面白いと感じた。他にも洋食屋さんやカフェとして残っており、京都という町に近代建築は昔から溶け込んでいたのだろうと考える。

また、今回の自主研修では京都文化博物館を訪れた。京都文化博物館は建物がレンガ造りになっており、重要文化財の旧日本銀行京都支店は別館として一般公開されている。「戦後京都の『色』はアメリカにあった！」という展示を見に行き、戦後京都の姿をカラーのスライドフィルムで見ることができた。米軍関係者のために建てられたスーサイド・シアターが現・京都宝塚会館になっていたり、ドーナツショップが現・藤井大丸になっていたりと、現在も占領期当時の名残があることが分かり、米軍関係者の活動領域であった現在の観光スポット周辺では、外国文化を柔軟に受け入れることができるようになり外国文化も普及されやすかったのではないだろうかと考える。

旧日本銀行京都支店

2. 京都の洋食文化

あまり知られていないものの、京都はコーヒー、パンの消費量が多い都市であり、また老舗の洋食屋さんやイタリアン、フレンチのお店も多く建ち並んでいる[(1)]。京都を街歩きして分かることの一つとして、カフェが非常に多いことが挙げられる。そして、その多くのカフェがモーニングをやっている、もしくは朝早くから開店していることが分かった。これは京都で比較的人の多い観光地周辺でなくとも言えることで、地元の人々がカフェのモーニングを利用することは日常的なことなのだろうと考えられる。札幌では、街中のチェーン店のカフェなどであればモーニングをやっていることもしばしばあるが、ほとんどのカフェは京都のカフェのように朝7時や8時という早い時間帯に開店はしていない。これには、冬場雪で足元が悪く、朝早くから外出をしないという北海道の土地柄も関係しているのかもしれない。また、札幌のコーヒーは比較的深煎りのコーヒーが主流であるのに対し、京都のコーヒーは苦みと酸味のバランスが取れた中煎りのコーヒーが主流である。冷めても苦みや渋みを感じにくく、むしろ甘味を感じるほど、マイルドな味わいになっていた。訪れた何店舗かのカフェでコーヒーを淹れる時のお湯の温度を伺ったが、温度が高いほど苦みや渋みが出やすいため低めの温度で淹れているのではないかという予想に反し、「沸騰したお湯を少し置いたくらいの温度」という比較的高い温度のお湯で淹れていることが分かった。京都のカフェで出されたコーヒーはどれも冷めてからが美味しいものばかりで、食事と共にゆっくりと楽しめるコーヒーであると感じた。

HIVE COFFEEのモーニング

さらに、京都はパン屋さんも多い。駅の構内にパン屋が入っていたり、パンの自動販売機も見られた。スーパーのパンコーナーも、札幌と比較して品ぞろえ、量も豊富であり、京都では日常的にパンが多く食べられていることがうかがえた。コーヒーとパンの消費量が多いのは、相互作用的な面もあるだろう。

おわりに

今回のフィールドワーク研究を終えて、京都は「和」だけを楽しむ場所ではないことが分かった。日本の伝統・文化など、日本らしさが詰まっている京都だが、もっと京都を楽しみたいと思うのであれば、イメージの裏側の京都にも注目してみてはどうだろうか。「見る」という分野では、近代建築の他に、「京都国際マンガミュージアム」、「おもちゃ映画ミュージアム」もお勧めしたい。「京都と洋」というバランスの面白さや、京都の持つポテンシャルが、より高いものであると感じてほしい。

〈参考文献〉

(1) 柏井壽『京都の路地裏　生粋の京都人が教えるひそかな愉しみ』(2014年、幻冬舎)

京都に残る鎌倉時代の遺跡を巡る

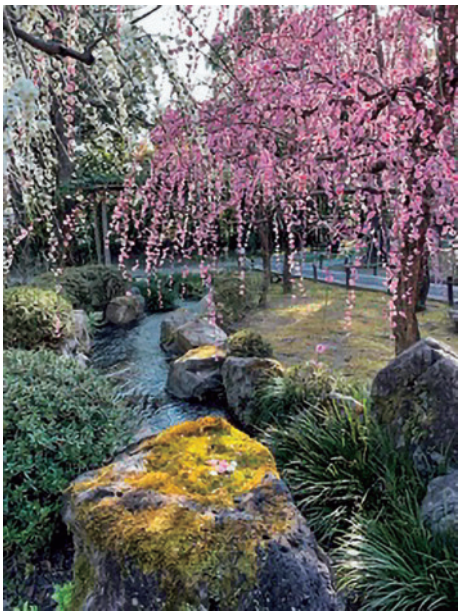
1部日本文化学科　2年　2721184　南　咲希

私は、京都に残る鎌倉時代の遺跡を巡ることをテーマに自主研修を行った。政治の中心が鎌倉に移り、衰退したと言われることも多かった京都が、実際はどのような姿をしていたのかを探ることで、当時の幕府との関係性を知ることができると考え、このテーマに決めた。

フィールドワークの事前準備として、鎌倉時代にまつわる歴史小説をいくつか読み、当時の出来事や、京都にゆかりのある人物について改めて確認した。また、私がこの時代に興味を持つきっかけになった大河ドラマ『鎌倉殿の13人』を再度視聴し、当時の鎌倉と京都の関係性についても理解を深めた。3日間のフィールドワークでは、京都だけでなく滋賀県にも足を運び、様々な地を訪れることができた。そのいくつかを紹介する。

はじめに、平氏打倒の令旨を出したことで知られる以仁王らにゆかりのある高倉神社と平等院を訪れた。高倉神社は閑静な住宅街の中にあり、そこに向かう途中にある井出の玉川は、和歌の名所としても知られている。初日に訪れた大山崎町歴史資料館で、後鳥羽上皇にゆかりのある人物として名を挙げられていた藤原定家もまた、この場所で歌を詠んでいたようだ。平等院では、月岡芳年の『頼政卿自刃ノ図』を見た。志半ばで自害に追い込まれた頼政の悔しさがにじみ出る表情が非常に印象的だった。天皇に関わる場所として、城南宮にも訪れた。ここは、源実朝が憧れたという貴族の姿がよく表れている、とても華やかな場所だった。私が訪れた3月初旬は、しだれ梅と椿が見頃で、華やかな離宮の姿が、当時のまま残されていた。

次に、源氏にゆかりのある石清水八幡宮や滋賀県にある三井寺などを訪れた。これらは山の高い位置にあり、すべて見て回るのに2時間ほどの時間を要した。当時は今ほど道も整備されておらず、スニーカーなどの歩きやすい靴もなかったため、非常に大変な道のりだったと考えられる。しかし、これほどの苦労をしてでも、頼朝らは上洛するたびに寺社への参拝を欠かさなかったという。それほど、京都にある寺社が持つ力は大きく、それは幕府側も理解していたのだろう。この他にも、六波羅蜜寺や、頼家の援助を受けた栄西によって建てられた京都最古の禅寺である建仁寺を訪れ、源氏と京都の寺社との関係について理解を深めた。


城南宮のしだれ梅

その他、源義経と静御前が出会ったとされている神泉苑にも訪れた。ここは二条城のそばにあり、静御前が雨乞いの舞を踊った場所と言われている。御朱印には義経と静御前がそれぞれ描かれており、今でも二人の出会った場所として大切にされていることが分かっ

た。そして、滋賀県に足を運んだ際、木曾義仲にまつわる場所として、義仲寺を訪れた。ここは木曾義仲と巴御前、さらには俳人の松尾芭蕉の墓がある寺である。寺の中にはいたるところに芭蕉の句が刻まれた石碑があり、中には弟子の又玄が義仲のために詠んだ句もあった。その後、木曾義仲が討たれた宇治川の戦いをはじめ、多くの合戦が行われた宇治川を訪れた。川のそばには昭和になってから建てられた石碑があり、源平合戦から承久の乱に至るまでの、この川で起きた一連の出来事が刻まれていた。実際に訪れたことによって、京都の要衝と呼ばれるこの川の重要性がよく分かった。

木曾義仲の塚

以上がフィールドワークで訪れた場所の報告である。ここから、鎌倉時代の京都は様々な戦いにより荒廃していたことは事実であるが、一方で貴族らしい華やかな姿も持ち合わせていたことが分かった。幕府関係者は京都の寺社をよく訪れ、復興の支援も積極的に行うなど、朝廷との関係を重んじていた。政治の中心が鎌倉に移ったとはいえ、敵に回すには恐ろしいと感じさせるほどの影響力がまだ当時の朝廷にはあったのではないかと考えた。

最後に、フィールドワーク全体を通して学んだことを紹介する。一つ目は、実際にその地を訪れることで、本やドラマで見るよりも、当時の状況や過酷さを詳しく知ることができるという点だ。想像していたよりも流れの速い川や、過酷な山道、それを超えた先に見られる絶景などを見たことで、より歴史に対する理解を深めることができた。それと同時に、これまで抱いたことのなかった新たな疑問を持つきっかけにもなり、より研究に対する意欲が高まった。二つ目は、当時の人の目線に立ってフィールドワークを行うことの重要性である。これは、2日目の演習の際、お世話になった立命館大学の村中先生に教えていただいたことである。こうすることで、当時の地形に目を向けるきっかけが出来たほか、先に挙げた通り、歴史を理解する手助けにもなった。そして三つ目は、史実をある程度理解しておくことの重要性だ。フィールドワークを行う前に、一連の歴史を理解しておくことで、スムーズに当時の世界に入り込むことができた。私は、事前に様々な媒体から歴史を学習していたことで、新たな気付きも得ることができたため、今後も実践していきたいと考えている。

今回のフィールドワークでは、以上のような成果を得たほか、様々な面から歴史を理解することの難しさや重要性、楽しさなども学ぶことができた。

〈参考文献〉

永井路子『源頼朝の世界』（2021）朝日新聞出版
永井路子『歴史の主役たち　変革期の人間像』（1996）文藝春秋
朝日新聞出版『まち歩き地図　京都さんぽ 2023』（2023）

高札場が立てられた場所がなぜ三条大橋だったのか

２部日本文化学科　２年　2821117　久保　雪菜

今回の演習での調査テーマは、「高札場が立てられた場所がなぜ三条大橋だったのか」である。高札場とは、幕府が決めた法度や掟書などを木の板に書き、人目を引くように高く掲げる場のことである。このテーマの設定理由は、江戸時代の幕府と町人がどのようなコミュニケーションをとっていたのかについて興味を持ち、高札場というコミュニケーションツールに着目した。このテーマの調査方法は、京都の町を描いた洛中洛外図屏風などの絵画資料の観察と、高札場が立てられていた三条大橋周辺の現地観察をおこない、江戸時代の人々の動きを探る。本レポートは現地観察の結果を中心に論じる。

高札場について説明された看板

はじめに、高札場が立てられていた場所が三条大橋であったため、現地調査として三条大橋を訪れ、その周辺に何があるかを観察した。そこには三条小橋商店街振興組合による高札場について説明された看板があった。その内容には、様々な高札の種類が紹介されており、具体的には、親兄弟と仲良くし、家業に専念せよと書かれた「親兄弟の札」、人足（荷役などの力仕事をする労働者）に担がせる荷物の重さや料金が書かれた「駄賃の札」、キリシタンの不審者を発見すれば銀五百枚の褒美が出るとした「切支丹の札」、毒薬、偽薬の売買を禁じた「毒薬の札」、放火を見つけたらすぐに届けよと書かれた「火を付る者の札」、密輸品が見つかれば差し押さえ、役人が立会いの元、封印すると書かれた「唐物抜荷之儀の札」などがあった。

また、三条大橋周辺には、高山彦九郎皇居望拝之像があった。この像は群馬県出身の武士である高山彦九郎が京都に出入りする際に、京都御所に向かって礼拝している様子を表している。この像の説明書きには、江戸時代の三条大橋が東海道五十三次の起終点にあたり、当時の都の出入口であったと書かれていた。このことから、江戸時代には三条大橋という都の出入口によって、外部との関わりが盛んであったことがわかった。加えて、三条大橋には刀傷がついた擬宝珠があり、その傷は江戸幕府の末期に起こった池田屋事件の際についたものだと言われている。この事件は、京都三条木屋町の旅籠・池田屋に潜伏していた長州藩・土佐藩の志士などに向かって、京都で治安維持活動を行っていた新選組が押し寄せた事件のことである。このことからも、三条大橋周辺は長州や土佐などの外部との関わりが多かったことが窺える。

さらに、三条大橋の特徴を明らかにするため、三条大橋の他に二条大橋、四条大橋、五条大橋、七条大橋も現地で観察した。二条大橋について、この橋の下には京都府が整備した鴨川ギャラリーがあり、国宝上杉本洛中洛外図屏風の右隻の写真パネルとその説明書きがあった。しかし、二条大橋に関する説明書きはなく、周辺に二条大橋に関する看板も見当たらなかった。四条大橋について、四条大橋周辺にある看板によると、平安時代の永治２年（1142）に祇園社（八

坂神社の旧称）参詣のために架けられた橋である。また、四条大橋周辺には、八坂神社や建仁寺へ至る花見小路などがあった。五条大橋は、この橋周辺の看板によると、平安時代、現在の五条通は六条坊門小路と呼ばれており、六条坊門小路の鴨川には橋が無かったが、豊臣秀吉が天正 18 年（1590）に当時の五条通（現松原通）の橋を現在の場所に移転した。また、二条大橋の下に設置された鴨川ギャラリーの上杉本に描かれた五条大橋の説明書きによると、清水寺へのお参りの道として利用する人々の様子が描かれていることや、弁慶と牛若丸が出会ったという伝説で知られている橋であることがわかった。七条大橋は、この橋の周辺にあった看板によると、明治末期に進められた「京都三大事業」（第二琵琶湖疏水の建設、上水道事業、道路拡張及び市電の敷設）に際して建設された橋であることがわかった。しかし、江戸時代の記述は見られなかった。

高山彦九郎皇居望拝之像

高札場が設けられていた三条大橋と三条大橋以外の橋（二条大橋、四条大橋、五条大橋、七条大橋）の特徴を現地観察を通して比較してみると、三条大橋にはあるが、それ以外の橋にはないものがわかった。三条大橋について、高山彦九郎皇居望拝之像から江戸時代の三条大橋は東海道五十三次の起終点であり、都の出入口であったことがわかった。また、池田屋事件の際に付けられた擬宝珠の刀傷から長州や土佐の人々が出入りしていたと考えられる。したがって、三条大橋には「外部との関わり」が多くあったと考えることができる。一方、二条大橋、四条大橋、五条大橋、七条大橋からは、「外部との関わり」に関する情報は見られなかった。四条大橋が架けられたのは、祇園社参詣のためであり、四条大橋周辺にある八坂神社や建仁寺へ至る花見小路などは京都の中にあるため、京都内の人々が多く利用していたと考えられる。また、五条大橋は、清水寺へのお参りの道として利用する人々が多かったことがわかったが、清水寺も京都の中にあるため、京都内の人々が多く利用していたと考えられる。このことから、三条大橋には外部との関わりが多く見られるが、それ以外の橋には外部との関わりが見られないことがわかる。したがって、三条大橋に高札場が立てられたのは、他の橋に比べて「外部との関わり」が頻繁にあったからだと考えられる。

現地観察の結果を中心に三条大橋に高札場が立てられた理由を追求したが、三条大橋の高札場の内容にあった、キリシタンの不審者を発見すれば銀五百枚の褒美が出るとした「切支丹の札」や密輸品が見つかれば差し押さえ、役人が立会いの元、封印すると書かれた「唐物抜荷之儀の札」などは、京都の外からやってくる人に向けたメッセージであり、京都内と京都外で人々のコミュニケーションが行われていたことがわかった。

〈参考文献〉

杉原利治『高札ものがたり』（2019 年、合資会社　垂井日之出印刷所）
田中緑紅『京の三名橋　復刻版　上　三条大橋（緑紅叢書）』（2019 年、三人社）
小島道裕『洛中洛外図屏風：つくられた「京都」を読み解く』（2016 年、吉川弘文館）

京都の川を巡る

1部日本文化学科　4年　2719161　竹花　美恵子

京都の街について、何かを伝えようとするなら、川の存在が大きいのではないかと考えた。そこで、私は、今回のテーマとして京都の川について調べてみることにした。京都の人々は、どのように、川の流れや水辺を利用していたのだろう。永く、川に親しんだ都人のように、川のほとりを歩くことにした。

京都の中心部には賀茂川と高野川が合流し、鴨川が流れている。鴨川は、京都市北部の桟敷ケ岳を源流とし、京都市南部の桂川との合流点に至るまで、京都市内を南北に流れる、約23kmの河川である。賀茂川は合流後なぜ、鴨川と呼ばれるのか。鴨川の上流には貴船川があり、最終的に西部を流れる桂川に合流する。

川巡りは貴船川からはじめる。朝の気温は2度、清々しい森閑とした里山の中に貴船川は流れている。川床で有名であり、川の中に床几をのせる杭がみられる。都人はここまで遠出をして、涼を求めるのかと不思議であった。

貴船神社にお参りする。水の神様を祀り、枯れることのないご神水が境内にある。水占みくじを試してみる。水占みくじとは、ご神水に浮かべて吉凶を占うおみくじのことで、何も書かれていないおみくじが、水に浮かべると文字が出てくる。結果は「末吉」で旅行は水難の相とあり、これからの行動に「注意しなさい」と受け止めた。

貴船川は賀茂川に合流する。賀茂川の東側にある上賀茂神社をお参りする。境内には、山からと賀茂川から水が引かれ「ならの小川」が流れている。ちょうど3月3日のひなまつりの日と重なり、子ども連れの親子が多く、「流し雛」が行われ、梅の小枝と流し雛がセットで渡され、私も参加して願い事を書き小川に流し見守った。

賀茂川は、賀茂大橋の北で高野川と合流する。合流地点から、鴨川となる。慣例として合流より上を「賀茂川」とし、それより下流を「鴨川」とする。河川法では下流部の河川の呼び名で全体を統一することが通例とある。鴨川の水辺は京都の人の憩いの場、出かける場所であるようで、飛び石を楽しむ、ジョギング、散歩やサイクリングをする人が多く見られた。

丸太町橋北側、鴨川の西岸に江戸時代後期の頼山陽の書斎である山紫水明処があった。屋根を見るだけであったが、その当時はさぞかし鴨川から東山の眺めは素晴らしかったはずである。

同じ丸太町橋の南側からは、鴨川から取水された、みそそぎ川が始まる。ここは5月から9月までの間、納涼床に利用されるためか、川の西岸に料亭が並んでいる。

二条大橋の南から、同じく鴨川を水源として、高瀬川が始まる。ここから五条大橋北側まで三つの川が平行に流れていることになる。高瀬川は安土桃山時代から江戸時代初期の豪商角倉了以と素庵が木屋町二条付近から伏見に至る約10kmを開削したもので、これにより京都と大阪が淀川経由で結びついた。現在の高瀬川は飲食店が並んでいる。遺構として、一之船入のみ残っており、高瀬舟が復元されていた。河原町三条通には坂本龍馬が身を寄せていた材木商「酢

屋」があり、現在２階は「ギャラリー龍馬」となっていて、店の人によると龍馬が眺めていたのは五之舟入であり、九之舟入まであったがすべて埋め立てられたと説明してくれた。龍馬になりきり、格子戸から外を眺める。

西部を流れる桂川は、京都市と南丹市を隔てる佐々里峠に発し、亀岡市、大山崎町・八幡町で宇治川、木津川で合流し淀川となる。奈良時代から、丹波から筏流しによる木材の供給、米や塩、鉄、石材など京都との水運の役割で重要な川である。

流域では、観光で有名な保津峡、嵐山があり、嵐山を訪れると、保津川下り、渡し船、貸しボートを楽しむ人が多く、渡月橋付近の歩道は人が交差できないほど混雑していた。

桂川の西側にある桂離宮を訪れる。説明をする方から、かつては桂川を船で渡り、川の水位が現在よりも高いため、引き込み水路を伝って船を川から別荘内に引き入れることができ、廻遊式庭園の池に水も引きこむことができた。現在は桂川の水位が低くなったため、池には地下水を使っている。高床式の書院は広庭を眺めるためには高さの都合が良く、また桂川の氾濫に備える、床下に風を通すという実用的な面もあったそうである。

桂大橋の西側に常夜塔がある。橋がない頃、船の往来を見守ったことがわかる。

宇治川を訪れる。宇治茶の産地でもある。JR の宇治駅を降りると、有名なお茶舗の看板が見られ、お菓子屋さんも並び、よい香りが、平等院の参道まで続いている。

宇治川は上流にダムがある影響か、鴨川・桂川より水量も多く、流れも急であった。

宇治川は、宇治から伏見を経由し、大阪への水運を担っていた。次に宇治からお茶を運んだ伏見へ行く。伏見は酒造りの町として有名である。

宇治川から引かれた派流沿いには、白壁や板塀の酒蔵がみられ、坂本龍馬の寺田屋前の船着場趾もある。濠川との合流地点には、であい橋があり伏見港へ続く。現在は伏見港公園となっている。宇治と伏見の間は十石船、伏見と大阪の間は三十石船が舟運を担った。後 10 日ほどで、十石船・三十石船による酒蔵を巡る遊覧船が開始されるようで、残念であった。

京都は良い水に恵まれたことで、宇治のお茶、伏見の酒は産地となり、豆腐、京料理、京菓子、京野菜は美味しい食文化である。茶道や華道の発展も水があってこそで、水の文化ともいえる。鴨川、桂川、宇治川などからの水利用が果たす役割も大きい。みそそぎ川、高瀬川は鴨川から取水している。川の水辺は京都の人が楽しむ場所である。京都には、まだまだ、たくさんの川が存在している。川巡りは終わりが無く、これからも歩き続けたい。

上賀茂神社の流し雛

伏見･三十石船の模型展示（三栖閘門資料館）

鍾馗さん探しから広告まで、変化し続ける京都を考える

2部日本文化学科　4年　2819130　髙山　礼海

1. はじめに

今回の演習で、私は「除災招福の京都を歩く―庚申信仰・鍾馗さん・鬼門除け―」というテーマを設けた。本レポートでは、3つのキーワードのうち「鍾馗さん」について報告する。鍾馗さんは道教において疫病除けの霊力があるとされ、信仰されている。他の地域にも鍾馗さんはいるが、京都の鍾馗さんは、「お寺周辺はもとより〔……〕一般的な戸守りとして扱われた」（小沢 2012：10）側面もある。今回は、実際に向いている方角に規則性があるのかどうかの調査を目的とした。

2. 調査計画

鍾馗さん探しについて、団体研修時と、自主研修2日目に京町通の「鍾馗さん密集地域」（同書:97）を詳しく調査する予定をたて、地図に見つけた場所と向いている方角の記録を試みた。方角調査のコンパスは、スントのベースプレートコンパスを準備した他、スマホアプリ Smart Tools co. の SmartCompass と Axiomatic Inc. のデジタルコンパスを用意した。スマホアプリ使用時には磁石付きのスマホカバーは外した。地図について、google map を印刷したが、右京中央図書館に赴き適した地図の相談もすることにした。

また、自主研修2日目には、「京瓦」の伝統技術を只一人受け継ぐ「京瓦鬼師」の指導のもと、鍾馗さん作りを体験することにした。

3. 鍾馗さん探しを実際にしてみた結果

右京中央図書館のレファレンスでは、地図の入手はできなかったが、他のキーワードも含め、情報収集を深められた。ホテルにて、コンパスの具合を確認したところ、ベースプレートコンパスが上手く使えなかったので、スマホアプリを主に使うことにした。

自主研修1日目の道中では2体発見した。自主研修2日目には、近鉄丹波橋駅を下車して、京町通りと両替町通りを歩いた。思ったよりも範囲が広かったため、南を丹波橋通り、北を上板橋通りで挟んだ道路上に限定して調査し、8体の鍾馗さんを発見できた。民家にカメラを向けたり、コンパスを構えたりすることが躊躇われたため、スマホで写真や方角の記録を残すことは少なかった。

表1：鍾馗さん探しをまとめたもの

出入口の上の小屋根	16（うち木箱入り1体）
出入り口の右上か左上	7（うち木箱入り1体）
小屋根の真ん中周辺	5（うち木箱入り1体）
小屋根の右端か左端	3（うち木箱入り1体、車庫の上1体）
その他	2（店の看板の上1体、出入口の上で宙ぶらりん1体）
不明	3

写真1：鍾馗さん作り体験、ヘラで傷を埋めているところ

写真2：小屋根の上の鍾馗さん

気付きとして、道路に沿って探したためか、鍾馗さんは道路に正面を向けていて、方角はばらばらであった。全 34 枚の写真をもとに、36 体の鍾馗さんが建物のどこに位置していたのかを表 1 にまとめた。序盤は全体像に注目せずに写真を撮って、その位置が判断できない写真があった。出入り口の真上だけというわけでもなく、1 つの小屋根に 2 体並んでいるものや正面側は開いている木箱入りのもの等、多様な姿が見られた。

4. 鍾馗さん作り体験を通して

自主研修 2 日目に、浅田製瓦工場の「鍾馗さん」作り体験に参加した。布を親指に巻いて、石膏の型に粘土を中心から外側に引き延ばしながら詰め、厚さを調整する。正面側の型と後背側の型を合わせた後、ヘラで形を整える。作業工程の説明中で、「この大きさのは(小さいので)、下駄箱の上に載せて魔が奥までこないようにしたほうがいいかも」と話していた。玄関の中に飾ることも多いようだ。作りながらお話を伺うと、壊れた場合は新しく迎えたりすることもあるそうで、鍾馗さん作りは続いており、海外からの注文もあるという。実際に、新築に迎えたいということで体験に訪れた方もいた。工場見学では、工夫され続けてきた瓦の歴史的変遷と今現在作られている作品をご説明いただいた。3D プリンターで石膏の型を取った幾何学的なタイルや、粘土をインクに用いてシルクスクリーン印刷を施し、文様や絵を描いたコースター等が目に鮮やかだった。

5. おわりに

京都というと、昔ながらの唯一つの技が唯一筋に受け継がれてきたとイメージしがちだ。しかし、今回の研修全体を通して、変化し続けて現在の文化として見えていることが分かった。さらに、変化は過去にあっただけのものではなく、今現在も期待されて、もたらされているものなのだ。鍾馗さんを通して、瓦作りの製法や瓦の形の変遷が伺えた。本報告以外の研修では、庚申信仰を通して、仏教的解釈を加えて取り入れる資質が仏教にあることや、鬼門除けを通して、鬼門除けの猿の取り換えのお話が伺えた。また、赤山禅院の祈祷では「手術成功」「新型コロナ」「世界平和」の言葉が聞こえてきた。高台寺の庭園には LED が埋め込まれてライトアップを補助している他、プロジェクションマッピングもできるようになっていると伺った。京都駅の広告の文字に、「『伝統』と『革新』。『変わらぬ私たちの道標』と『止まることなき時の流れ』。未来を信じ歩むその先にあるのは―」とあった。自主研修最終日の帰り際に、この広告がふと目にとまり、その言葉に得心がいくようになった。この変化こそが私の本研修の成果だと考える。

〈参考文献〉

浅田製瓦工場パンフレット 4 種

小沢正樹『鍾馗さんを探せ！！京都の屋根のちいさな守り神』淡交社、2012 年。

千利休を生み出した堺の地政学的特徴

2部英米文化学科　4年　3019103　池田　大青

今回最初にテーマとして選択したのは千利休だった。以前から茶道に興味があったが、その歴史について真面目に調べたことはなかったので、京都で茶人として成功した利休について調べる良い機会になると思ったからだ。計画を練るにあたってすぐに気づいたのは、彼は堺の出身であるから大阪まで出向いて調査をしなければならないということだ。それが結果的には堺の地政学的な特徴という新たなテーマを得るきっかけになった。

調査の計画は自主研修初日から大きな変更が必要になった。一日目は利休の生まれた堺を訪れ、「さかい利晶の社」、またキリスト教と茶の湯の関係を調べるため「さかいザビエル公園」、「大阪教会址」などを訪れる予定であった。しかし、さかい利晶の社で史料を見ていくうちに、堺の地理的な特徴と歴史との関係について気づき、茶の湯自体よりも町の歴史により強い興味を持った。そこで予定を変え「堺市博物館」において堺の歴史についてより深く学んだ。京都に戻り、二日目には事前の計画に沿って「茶道総合資料館」、「京都市考古資料館」などを巡ったが、やはり茶道そのものより地理的条件のほうに興味が移ってしまっており、調査の滞りは否めなかった。しかし、堺において知った河内湖の存在を思い出した。堺の歴史と大きく関わる、この古代の湖、または内海について調べるため、三日目は四条畷市立歴史民俗資料館に向かった。四条畷市と堺市はこの湖を共有する同じ地域に存在した。一方で貿易都市としての堺の発展は大阪湾を軸に起こったものであるから、堺の発展は古代と中近世の間で、地形の変化と共に場所的にも移動しているのである。その後は周辺の古墳を訪れた。これらの古墳の位置関係から湖の大きさの変遷を調べることができる。訪れた古墳は忍ケ丘古墳と石宝殿古墳で、どちらも石室が残っている、雰囲気のある古墳である。また石宝殿古墳の石室は囲いなどがされていないため、中に体を入れてみることも可能である。

さて、堺は貿易都市として歴史上有名である。そしてそれは当然地理的な必然性に基づくものだと私は勝手に思っていた。しかし、そうとも言えないようである。堺市博物館を訪れるとすぐに気づくが、周りには大量の古墳が残されている。つまりこの辺りの地域は古代に非常な発展をしていたということだ。四条畷市立歴史民俗資料館にも出土した多くの葬祭品や、銅鐸などが展示されている。このような地域の発展が後の時代における堺の貿易拠点としての地位に直接つながっているかといえば、そうとも言えない。この点は堺市博物館の職員の方にも多くの解説をいただいたのであるが、堺は古墳時代以降歴史から姿を消し、文書に登場するのは鎌倉時代の1220年頃になってからである[(1)]。つまり堺が発展したのはかなり後の時代になってからのことなのだ。では堺の発展が

忍ケ丘古墳

どのように始まったのかといえば、1467年に起きた応仁の乱によって、兵庫津の港が使えなくなり、幕府と細川氏の船が堺の港に入ったことがきっかけである[(2)]。つまり、それまでは兵庫津のほうが貿易港として評価されていたのであって、堺の発展は歴史の巡りあわせによって起こったとも言えるのだ。戦争によって影響を受けるのは港だけではなく、京の都も荒廃が進んでいた。そこに多くの文化人が堺へと逃げ込み茶の湯などの基礎を築いた。

安土桃山時代の堺において特徴的なのは自治がある程度発達していたことである。堺は免税特権を保持し、また幕府の重鎮である細川氏が守護となったことで幕府の直轄地的な性格が強くなり、守護大名からの影響を受けにくかった[(3)]。さらに加工技術も優れていた。市街にある堺伝匠館を訪れると、包丁や織物、線香などの伝統工芸品が数多く展示されている。安土桃山時代には貿易港であることを利用して多くの技術を学び、鉄砲や刀、織物の名産地となった。しかし江戸時代に入ると戦争が無くなり、そして鎖国が始まると堺は貿易港としての機能を失った。また鉄砲や刀も必要なくなり、持て余した技術が包丁のような現在の伝統工芸品に使われるようになったわけだ。

ここで疑問なのは、ではなぜ古墳時代には発展していたのだろうかということだ。これには先述した河内湖が大きく関わっていると思える。縄文時代、大阪湾はより広く、狭い海峡を通って内海が広がっていた。この内海は弥生時代から古墳時代にかけて汽水化していき、その後人間の手も加わって土砂が堆積し湖が縮小していく。つまり文明が栄えるのに必須な豊富な水資源があったわけである。四条畷市立歴史民俗資料館に展示されているところによれば、5000年前ごろに讃良川遺跡ができ、さらにその300m上流に1700年続く更良岡山遺跡を作る集団が成立した。他にもこの湖をぐるりと囲うように多くの古墳が見つかっている。私が訪れた忍ケ丘遺跡からは最古のウマが出土している。湖が土に埋まり、沖積平野ができると、そこに生えた草原地帯と川という天然の柵がウマの飼育に適した環境を提供した。ウマの生産は主力産業となったようで、大和政権にも供給された。しかし奈良時代になると大和政権はより大きな土地での中央集権的な生産を開始し、この地域は衰退していく。この辺りの歴史は堺と酷似しているだろう。

調査結果をまとめる。この地域は古墳時代には大きな発展を見せていた。それは河内湖の存在によって水資源が豊富だったことに求められる。しかし、中世以降河内湖が縮小すると水資源もなくなり、この地域は衰退する。そして応仁の乱によって大阪湾が貿易拠点となったことで、堺は再び発展を遂げる。その中心は海岸線と共に西に動いたのだ。同時に文化人の流入もあり、千利休のような茶人たちが誕生していく。調査を終えて考えたこととして言えるのは、このような歴史が利休の像と結びついているのではないかということだ。堺が貿易拠点として発展していた町から工芸品の町に変わっていく中で、利休の茶人としてのイメージに商人としての実像が付け加えられるようになっていったのではないか。これについてはさらなる調査が必要である。

〈参考文献〉

(1) 桃木至郎・角山榮監修『アジアの海がはぐくむ堺――中近世の港町ネットワークを掘り起こす――』、堺市市長公室国際部、2009、p.6

(2) 同上

(3) 同上、p.25

令和4年度 日本文化特別演習報告書 第10号

発行日　令和5年3月31日
発　行　北海学園大学人文学部
印　刷　株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる

北海学園大学人文学部